

イニス、マクルーハンのメディア・コミュニケーション理論の位置(I)

——マス・コミュニケーション研究を照射する鏡として——

香 内 三 郎

目 次

- はじめに——課題の設定
- 第一章 マクルーハンの「理論」形成過程——リチャーズとリーヴィス——
- 第二章 『機械の花嫁——産業社会のフォークロア』の意図と方法——ポピュラー・カルチャーの位相——
- 第三章 イニス、メディア理論の構成——「時間」「空間」「バイアス」のトリアード——
- 第四章 「空間」の探求——「視覚空間」から「聴覚空間」へ——
- 第五章 マクルーハンの「正系」への批判——コミュニケーション・モデルと「効果」論——

はじめに——課題の設定

マクルーハンの講演、インタビューなど集めた『私を理解する』と題した本の序文を書いているトム・ウォルフは、次のように言っている。

「私は二〇世紀後半のある時期まで、研究の全分野を支配した他の人物を考えることは出来ない。十九世紀の終り、二〇世紀の初めの時代には、生物学ではダーウィン、政治科学ではマルクス、物理学ではアインシュタイン、心理学ではフロイトがいた。それ以来、コミュニケーション研究では、そういう人間はマクルーハンしか存在しない。もっと正確に言えば、マクルーハンとその物言わぬパートナーである。それをマクルーハン主義という形に仕上げたのは、物言わぬパートナーであった¹⁾。」

マクルーハンが一時期にもせよ、コミュニケーション研究の「全分野」を支配したかどうかは疑問であるが、ウォルフが「物言わぬパートナー」と言っている「信奉者」の群れが、大衆の人気の上下運動を、大きく左右していたことは間違いない。また、アカデミーと大衆ジャーナリズムの世界では、最初から微妙に反応が違っていただように思われる。

マクルーハンが、一般に知られる名前になるのは「本」で言えば、1964年『メディアを理解する——人間の拡張』を出版してからのことになる。初期の統計だと、それまでアカデミー・サークル内部で出まわっていたと思える『ゲーテンベルクの銀河系：活字人間の形

成』と合わせて、約 55,000 部（部数は概数、以下同じ）売れ、マクルーハンの勢威の頂点だと思われる 1969 年には、『メディアを理解する』（以下、マクルーハンの著作については、基本的にサブタイトルを省略する）だけで、ハードカバー、9,000 部、ソフト版 100,000 部以上の売行を記録するようになる。ヒュー・ケンナーが、あのかかなり難解な本が、ドラッグストアに並んでいる、といて驚くような大衆化であった²⁾。この間に刊行された、写真と絵をふんだんに使ったコラージュ・小型本『メディアはマッサージである』（クエンティン・フィオーレと共著）は、1967 年だけで、100,000 部売れるという盛況であった。明らかに、ウォルフの言う「物言わぬパートナー」の数量は、飛躍的に増大していた。

研究者の世界でも、代表的な例をあげれば、1968 年にレイモンド・ローゼンタールの編集で、『マクルーハン：賛成・反対³⁾』、という本が出ていた。このケネス・パークの重要な論文「“メッセージ”としてのメディウム」も入っているこの本、「賛成」論もないわけではなかったが、全体すでにこの次元では、否定的空気がみなぎっていた。嘲弄的な調子は、テオドア・ローザックの論文（“The Summa Popologica of Marshall McLuhan”）からもうかがえるが、なによりもローゼンタールの序文にはっきりあらわれていた。マクルーハンの著作は「科学」ではなく、一種神秘的な「黙示録」に近い、終末観だと断定しているからである。

マクルーハンのジャーナリズムの世界での評価移行を、簡単に辿っておこう。

1964 年、『タイム』誌は、『メディアを理解する』の書評をのせた。それは、「つかみどころのない精神の産物、パースペクティブに欠け、定義はゆるくデータとはぼしい、余計なことの多い」、「まさに、知性と傲慢さと擬似科学の結合した」と、酷評した。この本が「一夏の一時的な流行……客間のお遊びにはなるだろう」、と結論した。明らかに嘲弄である。この書評、この時期のアカデミーの評価もかなり反映していると思われるが、「擬似科学」というレッテルは、終生マクルーハンを苦しめることになる。

1965 年 2 月、ハロルド・ローゼンパークが『ニュー・ Yorker』の“本”のセクションで、マクルーハンのそれまでに出た全著作を書評した。『タイム』の書評とは違い、全体真面目なものであったが、マクルーハンに「ポップ哲学者」（“Pop philosopher”）と命名した。このレッテル、現代文化、あるいはサブ・カルチャーの「哲学者」だと言うのか、それともやや軽るっぽい「哲学者」だと言うのか、意味不明ではあるが、流通価値はあり、マス・メディアの世界におけるその後のマクルーハンの位置づけに、かなりの影響をおよぼしたと思われる。

同年の 11 月に今度は『ハーパー』誌が、“カナダの知的遊星”として、マクルーハンを取りあげた。この記事は明らかにマクルーハンの「理論」ブームを、一種の「カルト」現象として扱い、かれを多くの信者を集めるある種の「教祖」とみなしていた。このあたりからマクルーハンは『ニューズウィーク』の表紙にのり、『ライフ』、『エスクウィア』、『プレイボーイ』などの大衆誌に登場し、勿論、ラジオ、テレビにも出演して超有名人になる。1967

年の大衆雑誌にどの位記事があるかという数量的研究——現代でこうした調査の対象になる研究者はかれぐらいか——があるので、それを引かせて貰う。それで見ると、当時の国務長官ロバート・マクナマラが最高点で、あがっている11人のうち、一番低いのはジャン・ポール・サルトル。マクルーハンは、ボクサー、カシアス・クレイよりは順位が下であるが、マルチン・ルーサー・キング牧師よりは高い、という結果になっている。恐らく、この頃がマクルーハン勢威の頂点であったろう。一種、社会的イメージと化したマクルーハン「人気」浮揚の頂上である。

下降は急速にやってくる。一般の熱気は、自然に、なんの徴候もなく退潮して行くものだが、ある方面でマクルーハンの「理論的」声価に潰滅的打撃をあたえたのは、1971年に出たジョナサン・ミラーの割合小さな本、『マーシャル・マクルーハン』であった⁴⁾。ミラーの批判は、「聴覚」がほかの感覚系よりすぐれて、特権的地位にあるといったマクルーハンの基本テーゼには、なんの証拠もなく、「人をおどろかそうとして、巨大な嘘の体系」を提供しているという、激しい結論だった。ミラーの「本」は、今読んでみると「誤読」も多く、決してよい分析とも思えないが、黒か白かは判らないが、マクルーハンは「魔術師」だという一般のイメージを補強するところが、あったのかも知れない。加えて、ミラーは一時期マクルーハンの周辺におり、それだけ実像をよく知っており、ミラーはマクルーハン主義に対する「反・十字軍」キャンペーンなどと称していたらしいが、逆にマクルーハンの方から見ればストレートな「裏切り」行為であった。

長い忘却の時期が続く。1970年代の後半、カナダでコミュニケーションを学んだある研究者（後年、『マーシャル・マクルーハン：宇宙的メディア⁵⁾』という本を書く）は、『グーテンベルクの銀河系』はナンセンスで、『メディアを理解する』は、みんな間違っている。マクルーハンとその著作に近づかないように言われた、と証言している。また、ひどく嫌われたものだ、としか言いようがないが、アカデミーのある種の空気を象徴していることは、事実であろう。

マクルーハンの再評価、復活の季節到来の契機は、ジャン・ボードリアールの「流行」と、ボードリアールの言説を可能にする電子メディア、コンピュータの展開状況であろう。『ジャーナル・オブ・コミュニケーション』誌の1981年の特集“生きているマクルーハン”，あるいは日本の『大航海』誌の特集「マクルーハン再考・マスコミ批判の原点」を、この脈絡であげておいてもよいだろう⁶⁾。もっと大衆的次元では、1993年に創刊した『ワイアード』誌が、「守護聖人」としてマクルーハンをあげており、相応に見間違いなところもあるが、特集もしている。

また2004年、カナダのオットワ大学から出版された再評価の本には、文化的にヨーロッパとアメリカの「中間地帯」になる、カナダの地域性からマクルーハンを位置づけよう、という試みもみられる。「世界村落」(“global village”)を構想した人はいやがるのではないか

と思うが、そうした視点も必要かも知れない。ただ、イニス、マクルーハンと並べて、政治思想家「所有的個人主義」のマクファースン (C. B. Macpherson) まであげるのは——ロバート・E・バーベ「マクルーハンとカナダのコミュニケーション思想⁷⁾」——行き過ぎではないか。

「評価」の現況はみて来た通りであるが、ここでの私の関心は、マクルーハンがポスト・モダンの先駆者だといった言説にあるのではない⁸⁾。イニスとマクルーハン、この二人のメディア理論が、マス・コミュニケーション研究の「正系」からすれば「異系」であることは、「正系」の諸論文によって言及されることはあっても、正面から組み込まれることのない、その意味ではほとんど無視されていることから明らかである。

逆に、この二人の全体像を解明することは、「正系」の運行して来た宇宙が、いかに大空の一角にかぎられて来たかを、明らかにすることになる。われわれは発展の途上で多くのものを切り捨てて来たが、私たちのなかに沈めていった様ざまな観念を、もう一度拾い上げてみるのも、意味のないことではあるまい。「純化」して行くことが、魅力のうすい「貧困化」につながらない、という保障はないからである。

第一章は、マクルーハンの思想形成過程を扱い、第二章は、かれの最初の著作『機械の花嫁』の方法を分析する。第三章で、イニスのコミュニケーション・メディア理論の位置づけを行い、第四章で、マクルーハンにおける「空間」概念の移行を追跡する。第五章では、「異系」からの「正系」に対する批判、その意味を検討する。以上が大略の構成である。

第一章 マクルーハンの「理論」形成過程——リチャーズとリーヴィス——

マクルーハンには、すでに「公式」に近い伝記もあり⁹⁾、ここではかれの「理論」形成に関連があると思われる伝記的事実について、略述しておくことにする。

ハーバート・マーシャル・マクルーハンは、カナダのエドモントンで、1911年7月21日に生まれた。曾祖父はアイルランドからの移住者、両親ともにバプテストの家系である。父親は、ブームの時期のエドモントンで不動産売買の事業をしていたが、第一次大戦の勃発と共に失敗、兵役にはとられるが、前線には行かずに除隊、以降、保険会社などに勤めるが、格別のことはない。

それに反して、母親の方は、舞台に立ってパフォーマンスをまじえながら、詩、ドラマ、小説を朗読し、旅まわりの公演でかなりの聴衆を集めることの出来る、職業的な朗読(家、師、どうよべばよいのか)であった。エロキューションの技術者である。母親エルジーはノヴァ・スコシアの学校で、ボストンのエマーソン・カレッジで「弁論術」(“oratory”)の教育を受けたジョセフィーヌ・L・グッドスピード女史に仕込まれたのである。昔のオラトリーを再現することは出来ないが、「肉体、顔、声を使って、多様な、魂の感情」を表現する技

芸は、かなりの訓練を要する、複雑な技術の集成であったようである。20年代のカナダでは、やや高級な娯楽として人をよべる、伝統的な話芸の一種であった。

容易に想像がつくように、この夫婦仲は相当に悪く、マクルーハンが苦勞したらしいが、この口頭の芸をもった母親から大きな影響を受ける。マクルーハンが、かなりの“母親っ子”だったことは、ケンブリッジ時代、ある時期には殆ど毎日のように母親に手紙を書いていることから、明らかである。おかげでわれわれは、当時のケンブリッジの先生方の講義方式、話す口調の特徴まで知ることができる。

南部に口頭文化の伝統が残っていること、詩人が大学、ラジオ、テレビなどで詩を朗読し、つまり母親がやっていた活動の復活であるが、新しい「公衆」を獲得しつつあることを熱っぽく語ったトム・ウォルフとの対談（「新しい神話的形態としてのテレビ・ニュース」、1970年）など、いい例であるが、後年マクルーハン自身も、この母の影響を陰に陽に強調した¹⁰⁾。どちらが先にあるのか。理論的にも「口頭文化」を重視するようになったマクルーハンの回想が、母親像を実態以上に色濃く染めあげて描いているのではないかと思うが、われわれは、その脚色の程度を問題にする必要はあるまい。

1933年春、大不況のさなかに、地元のマニトバ大学をゴールド・メダルをとって卒業。1934年、論文「詩人、劇的小説家としてのジョージ・メレディス」を書いてマニトバ大学からマスターの学位を貰い、奨学金、母の親類の援助でイギリス、ケンブリッジ大学へ行くことになる。

この時代にマクルーハンが読んだものは、マコーレイ、カーライル、ジョンソンなど、まるで明治の青年のようであるが、要するに一時代古い、後れて来た文学青年の「教養」であった。メレディスについての修士論文は、この延長線上にあり、特に言うことはないが、マクルーハンはいくつかの論文を「ザ・マニトバン」という学生新聞に寄稿した。とくに「明日、そして明日」と題する論文などは、カーライル、ラスキン、モリスなどを引き、現代世界は人間を墮落させている、むしろ中世共同体からいくつかの価値を復活させるべきではないか、と説いていた。もとより青年の作文ではあるが、なにがなしその後の思想的コースを暗示させるものが、ないわけではない。

1934年10月始めにマクルーハンがケンブリッジに着き、1936年まで大学に在籍することになる。学位取得の年限は短縮されるが、かれはチューターの意見もあって、学部からやり直した（正式の名称は“affiliated student”）。マクルーハンはこの地で伝説的なシェークスピア学者ドーヴァー・ウィルソンの講義を聞き、リチャーズ、フォルプス、キラー・クーチ（ホガートの先生）に習い、リーヴィスを知り、エリオット、パウンド、ルイス、ジョイスを読むようになり、黄金時代のケンブリッジが体現していた英文学・批評の「現代¹¹⁾」を、まるごと身につけることになる。これがマクルーハン「教養」の基礎となるわけであるが、その土台が、この分野では「正系」、あるいは「正系」になりつつあるものであったことに、留

意しておかなければなるまい。ここでは、リチャーズとリーヴィスから学んだことを二、三指摘しておこう。

リチャーズの思想は気に入らなかつたらしく、次の当ってはいくはない批判はしている。

「リチャーズは、すべての経験は人生の特定の状況に対して相対的だ、とみなすヒューマニストである。そこには、善、愛、希望……といった永久に続く、究極的な価値はなにもない。にもかかわらず、リチャーズは、客観的で、究極的で、恒久的な批判の基準を発見しようと思っている。かれは、こうした基準（なんと希望だ！）を、合理的存在にふさわしい、唯一の宗教としての知識人的文化を確立するために、見つけようとしているのだ。」

リチャーズの「無神論」（かどうかは問題であるが、マクルーハンはそうみている）、相対主義、ニヒリズムへの敵意あらわであるが、リチャーズが、マシュー・アーノルド以来の「文芸批評」を一種「代用宗教」化しようとする伝統に立っていることは、正確に見抜いていると言ってよい。そうした「思想的」反撥にもかかわらず、学んだものは大きい。

リチャーズは、桑原武夫が借用して「第二芸術論」を展開した『実践的批評：文学的判断の一研究』（1929年刊）——作者の名前をかくしたいろいろな詩を学生にあたえ、コメント・批評させる——の延長で「散文」を批評させる作業を、マクルーハンのクラスでやっていた。マクルーハンは、リチャーズから、詩や小説から「真理」や「美」といった抽象的カテゴリーを抽出したり、またそこに時代精神や、作者の人生のある局面における個人体験の表出をみる見方（そうかも知れないが、そんなことをどうやって「証明」するのか）を一掃し、それらを「読むこと」は高度な人間コミュニケーションであること、「文芸批評」とは、このコミュニケーション過程の分析に他ならないこと、を十分に教えられたようである。

リチャーズはこの時期、単語に文脈、使用者の使い方、意図に応じて多様な意味があること、逆に言って語には「適当な意味があるという迷信」を攻撃していた。したがって、ある詩を理解しようとする読者は、潜在的に「頭のなかでその詩を構成してみなければならぬ。」（言葉はリチャーズの高弟ウィリアム・エンブスンのもの）。これをほんの少し進めれば、メディアムの「内容」は、その使用者、受け手だという後年のマクルーハンのテーゼになる。また「内容」（“content”）よりも、「効果」（“effect”）だ、という強調も、このあたりから来るだろうことも容易に想像がつく。

後年、カナダのテレビ放送で「カナダの内容」が少ないと嘆く単純なナショナリストに対して、マクルーハンは、「ボナンザ」のようなアメリカ製の番組でも、カナダ人が視聴していれば「カナダ的内容」だ、という言葉浴びせた。一般には気のきいたジョークとしてしか受けとられなかったようだが、マクルーハンが本気でそう思っていたことは疑いない。かれのメディア、コミュニケーション観からは、当然にそうなる。

もう一つ重要と思われる影響をあげておこう。リチャーズは、欲望の満足、あるいは「読むこと」の目標設定のため、二〇世紀初頭の余り面白くない心理学を使って、内部の情念、

感情系のバランス論を唱えていた。なにが人間にとって「よい文学」であるか、決める必要があったからである。その「バランス」論の内容は、ここでの問題ではない。基準を設定するために、人間の「内部」へわけ入って行く方向性は、確実にマクルーハンに伝承されている。マクルーハンが基礎づけに使っている理論は「心理学」ではなく、もっと精巧な「形而上学」であるが、「内部」へ入って行く志向は同一である。その志向が究極よかったのか、悪かったのかは後で問題にする。

これもリチャーズの弟子ではあるリーヴィスに移ろう。リーヴィスはこの時学会の大ボス、アーサー・キラー・クーチと対立して、かれはリーヴィスが嫌っていたすべての権威を体現している、余り大学の仕事はせず（出来ず）、寧ろ『スクルーティニイ』の編集をしている。マクルーハンは、1935年5月、リーヴィス夫妻に会い、以降そのサークルに出入りするようになる。アメリカに帰ってからも、文通は続けている。

リーヴィスがデニス・トムスンと一緒に書き、1933年に出した『文化と環境』は、マクルーハンに終生大きな影響をあたえている。その「有機的コミュニティ」回復の思想もそうであるが、なによりも逃げられない現代「環境」に喰い入っているものとして「広告」、「ジャーナリズム」、「大衆小説」の文体分析をすすめているからである。その関連で言えば、作家は「真空のなかで」仕事をするわけではなく、「読者層」(“reading public”)を対象にしているのだとオーディエンスを軸にしてその歴史的展開を辿り、読者層の拡大と小説「内容」を関連させて説明した、リーヴィス夫人の『小説と読者層』も、マクルーハンの志向を固めるものであった。またなによりも、「本」でいえばリーヴィスの文学的キャノンを設定し直す作業、『イギリス詩における新しい方向』(1932年刊)『再評価』(1936年刊)によって、エリオット、パウンド、ジョイスなどのモダニズム文学に親しむようになったことであろう。ことにジェームズ・ジョイスの『ユリシーズ』、『フィンネガンズ・ウェイク』(本格的に読むのはずっと後のようであるが)は、一生変らない座右の書となる。かれはジョイスから、読者が積極的に読み、解釈して行く喜び——大分高級な娯楽であるが——一般に受け手が作品に「参加」して行くことの重要性を、学んでいる。ことに、日常生活で誰もが使う言語を嫌って、自分の発明したジョイス語で書いた『フィンネガンズ・ウェイク』は、絶対に読者の参加なしに読めない。後年、マクルーハンは、『世界的村落における戦争と平和』という本の欄外(一種の脚注か)で、『フィンネガンズ・ウェイク』からの引用を山と並べることになる。もし読んだとすれば、大方の読者は頁のかざりと見て読まないと思うが、かなり読者を悩ませる意識的行為である。

かれのローマ・カトリシズムへの改宗は、一生を通じてのマクルーハンの思考の基底となる。思考の特定の形態でいえば、トマス・アクイナスのトマス主義である。かれの導きの星であったジョイスもエリオットも、相応の留保はつくであろうが、少なくともマクルーハンの信ずるところでは、トマス主義者であった。マクルーハンがケンブリッジ在学時代、偶然チ

エスタートンの、産業社会、機械文明の熱烈でウイティな批判、『世界のなにが悪いのか¹²⁾』を読んで大いに共鳴し、熱心なチェスタートン・ファンになるのは、かなり知られている事実である。たしかにマクルーハン著作の文体には、チェスタートン特有のユーモア・逆説の影響（逆にいえば軽妙さはほとんどない）がみられる。ペロック・チェスタートンと続くカトリック・ヒューマンイズムの系譜につながるわけだが、コミュニズム、カトリシズム、ファシズムに引裂かれるイギリス 30 年代にあつては、詩人オーデンの軌跡が証明しているように格別珍しい現象ではない。

それよりもここでは、マクルーハンは改宗の少し前、その理由を母親に説明する手紙を送っている。それを引いて置こう。

「カトリックの文化は、チョーサーとかれの楽しい物語を語るカンタベリーへの巡礼たちを産みました。勝手気ままな熱情にこり固った文化が産み出したのは、『天路歷程』の孤独で、絶望的なクリスチャンでしかありません。——なんと違った種類の巡礼でしょう。カトリックの文化は、ドン・キホーテと聖フランシス、それからラブレエを産んでいます。私がカトリック文化について強調したいのは、そこには多様な、心の豊かな人間性があるということです。この現代の産業社会がつくり出す生活諸条件、緊張にかかわる特に忌まわしい、悪魔的で非人間的なすべてのものが、プロテスタントに由来するというばかりではなく、かれらはそれらを産出したことを誇ってすらいふ (!) ことを、とり立てて述べる必要もありますまい。あなたは私の『宗教狩り』が、どちらかと言えばかた苦しい『文化狩り』から始まったことを、よくご存知です。私は単にウニベックで見たように、人びとが卑少な、機械的で喜びのない、根なしの様式で生活しているのを、よいことだと信じられないだけです。そして私はイギリス文学を読み始めてから、人びとはそうした生活をする必要が全くないことを知りました。私が、どの社会でもその性格、食物、衣服、芸術、娯楽、究極的にはその社会の宗教で決定されるということを決定的に判るには、長い時間がかかりました。」

最後のくだりは、いかにも「宗教社会学者」がよろこびそうなテーゼが書いてあるわけだが、マクルーハンにとって、「宗教」の問題は「文化」の問題であり、プロテスタントの側から反論もあろうが、プロテスタンティズムと「産業社会」の諸悪とが等置されていることに注意すべきである。また、プロテスタントは暗く、ペシミスティックで、カトリックは明るいというのは、勿論通俗イメージではあるが、ともかく、マクルーハンがこの時期からオプティミズムへの志向をあらわにしていることも確かである¹³⁾。

マクルーハンは 1936 年にケンブリッジを卒業してから、アメリカのウィンスコンシン大学に職 (“teaching assistant”) をえる。ウィンスコンシンは、州立大学としてはミシガン、カリフォルニアと並ぶなかなかの有名校ではあったが、「ニューヨーク・知識人」の供給源として「進歩的」伝統が強く、その同僚のかもしれない出ず雰囲気は、マクルーハンにはなじまなかったようである。かれは「居心地のよいサークル」を求めて、1937 年、ジェスイット

の学校、セント・ルイス大学（“Instructor”）に移る。ジェスイットの聖職者を養成するセミナリオの延長という考えは、まだなかなか当局者の頭から脱けなかったようであるが、一つだけマクルーハンにとってよかったことは、この大学の哲学科が、トマス・アクィナス研究の牙城であったことである。マクルーハンはこのエチエンヌ・ジルソンの下で神秘思想家マイスター・エックハルトを研究したミュラー・サイム（Muller-Thym）と親交を結んだ。かれを通して、このセント・ルイス時代に、トミズム・中世、ルネッサンスの思想を徹底して学んだことの意義は大きいと思われる。マクルーハンが、1938年大学の文芸機関誌（“Fleur de Lis”）に、「ピーターかピーター・パンか」と題する論文を寄稿している。ピーターは勿論聖ペテロ、カトリック教会のことであり、ピーター・パンは、現代文明がつくりだす幻想と構造的な感情未成熟にとらわれた現代人の象徴である。溺れかかった西欧文明は、カトリック教会によって救済される（されるべきだ）というのが、その論旨であった。相当あらわな護教論と言わざるをえない。

マクルーハンが、英文学科の学科長（Milliam McCabe、かれ自身ケンブリッジのドクター）の好意で、休暇をもらいドクター論文を書くため、結婚した妻と一緒に1939年、再度ケンブリッジに留学する。9月、夫妻がケンブリッジに着く少し前に、第二次世界大戦が始まる。論文に選んだ対象は、エリザベス時代の風刺・論争家、ジャーナリストといってもよい「トマス・ナッシュ」（Thomas Nashe）であった。

マクルーハンが当初、「囚われたチュードルの散文」といった論文を考えていたらしい。カトリック殉教者、トマス・モアの処刑以後、イギリスの散文は停滞し、後退したというテーゼで、セント・ルイス時代の論文を逆方向に伸ばした内容であることは、改めて指摘するまでもないだろう。その構想がしだいに変わって、より広い枠組へ脱けて行く。われわれはこの性質上、この転換がマクルーハンの頭の中でどうして起こるのか、正確には突きとめることが出来ない。それを前提にした上でいうとすれば、理由は二つあるのではないか。一つには、どう基準を設定するのも問題であるが、モアの処刑後も、イギリスの散文は種類も多く、スタイル、ヴォキャブラリーも豊富化し、いささかもおとろえないという「事実」であろう。事はそれほど単純ではなく、マクルーハンも、それは認めざるをえない。

ナッシュの文章は、マクルーハンのケンブリッジ学部学生時代にある意味では、流行っていた。かれの精妙な“言葉遊び”が、エンプスンなどリチャーズ系統の「新批評」派にぴったりの分析対象だったからである。マクルーハンにも、そのことでなじみのある「散文」であった。しかし、もっと読んで行くうちに、マクルーハンが意外なことに気がつく。一見、自由ほん放、気の向くままに書き流しているかにみえるかれの「散文」が、実は厳密に説得の技術「レトリック」に支配されていることを発見したのが、その理由の二つ目ではないかと思われる。現在活躍中の思想史研究者クエンティン・スキナーの言葉で言えば「レトリカル・カルチャー」の存在である。

ここからマクルーハンは、ナッシュは、遠くキケロにまで行くルネッサンス「レトリック」の伝統に立ち、「弁証法」(ロジック)を基軸にするスコラ哲学者に反対していたのだ、という構図に到達した。結果から逆にみているわけであるが、かれのドクター論文の構造は、これで定まったとみてよい。かれは当時の「トリヴウム」(grammar, logic, rhetoric)の重要性に着目、なによりも西欧の思想史を、ソクラテス(弁証法)のソフィスト(レトリケー)批難に始まる、ディアレクティシャンとレトリシヤンの対立・抗争の歴史、として描き直したのである。それは、世界を見る二つの異った見方をあらわしている、というのが、マクルーハンの新しい地平に立った大構図であった。それは思考、あるいは表現(認識は当然ふくむ)の型の歴史的二項対立であって、まだコミュニケーション様式、メディアの概念は、入って来ていない。入ってこないほうが、よかったのかどうか。ともかく、マクルーハン「理論」を展開する舞台装置は、ほとんど出来上っているといってよい。

アメリカに帰ってからマクルーハンはこの論文、『かれの時代の学問のなかでのトマス・ナッシュの位置』(456頁のもの)を送り、1943年、ドクターの学位を貰う。予想がつくようにギリシア、ローマのレトリックについての説明が多く、ナッシュについては余り触れていないようであるが、評価は極めて高かった。

マクルーハンは1944年の夏、やはりカトリック系のオンタリオ、ウィザーにあるアサンブション・カレッジ(教会のバジリアン系の経営、当時はカトリックのなかで最もリベラルと言われる)に移り、1946年の夏、トロント大学(St. Michael's College)に移る¹⁴⁾。ここでの関心に関係のある一、二の論文について述べておく。

マクルーハンは学位をとってから、学会にデヴェューしようと思い、『ジャーナル・オブ・ザ・ヒストリー・オブ・アイデアズ』誌に、「フランシス・ベーコンの教父的遺産」と題する論文を投稿した。ドクター論文の部分要約といってもよい内容である。ところが、この論文、編集委員会から「書き直し」の要請と共に戻ってくる。素材は貴重だが、レトリックのことを書かないで、ベーコンに叙述を集中してくれ、と言う要求であった。同時に現在の文章の「混乱した構造」をもっと判り易くしてくれ、というおまけ迄ついていた。マクルーハンはこれを拒否、結局論文はのらない。マクルーハンの方が、この時のアメリカ・アカデミーより、先にいたことは確かだが、文章がふつうの論文の枠からはづれかかっていることは、もうこの時点かららしい。

もう一つは、1944年の1月『コロンビア』という大衆誌に出した「ダグウッドのアメリカ」という論文の、受け取られ方である。雑誌は「コロンプスの騎士」というカトリック系団体の出しているもので、部数50万前後とされる大衆誌であった。ダグウッドは、マンガ「ブロンディー」の亭主である。この論文は、ダグウッドの子供じみた思考、行動がいかにもブロンディーの支配下にあるか、拡大一般化すれば、いかに近年のアメリカが「女性化」しているかを論じたもので、言うまでもなく、リーヴィス伝来の「大衆文化」批評の一環で

あった。これもマクルーハンが予想もしなかった反応を受ける。あんなにいい夫、アメリカ人の鏡であるような、ダグウッドの悪口をいうのはケシカランという怒りである。そうした「読者」の反応を代表しているのが2月後の同誌に出る、ジョセフ・A・ブレイグという人の論文であった。内容を紹介する必要はあるまい。「マクルーハン氏よ、貴方こそ、ダグウッド・バムステッドを見ならっただうだ。』、といった激しい言葉が、そこには並んでいた。さすがのマクルーハンも閉口したようで、私の論文は「誤解」されている、という短かいコメントを出すにとどまる。なにがなし、後の『機械の花嫁』の運命を予感させる出来事ではある。

第二章 『機械の花嫁——産業社会のフォークロア』の意図と方法 ——ポピュラー・カルチャーの位相——

マクルーハンの最初の著作である『機械の花嫁』について、みてみよう¹⁵⁾。

この時マクルーハンが、ミズーリのセント・ルイス大学で“文化と環境”というコースを担当しており、そこで一種の教科書として、マクルーハンの言葉で言えば、商品文化に囲まれた消費社会における「生き方のガイド」として構想される。この40年代の後半に、モーティマー・アドラーらによる“西欧世界における偉大なる本”シリーズの刊行が、多くのアカデミーの協賛をえて、始まる¹⁶⁾。誰でも名前は知っている、だがほとんどの人が読んだことはない「偉大なる本」(“Great Books”)の連鎖を出版して、必要な「教養」として読ませようというのであった。マクルーハンは教育的見地からも、こうした動向には強く反撥した。そんな巨大な山脈のように「本」を並べたところで、「産業世界のわれわれにとって、自然で自発的な文化」は、メディア文化、ポピュラー文化でしかなく、それがわれわれの日常環境になっていることに変りはない。われわれが首までつかっている、この「商業文化」の理解、批評が、過去の「偉大な魂」と対話する前提ではないか、とマクルーハンは見たのである。

『機械の花嫁』は、全部で59項目、各項目平均2~3頁、ほとんどの材料は40年代にアメリカで出された広告、マンガ(ブロンディ、ターザン、スーパーマン、リル・アブナー)、新聞のレイアウト、ジョン・ウェインの西部劇映画、推理小説のテキスト、の分析を寄せ集めて構成されている。マクルーハン自身、この本は「決った順序」で読まなくとも構わない、どこから読んでもいいのだと言っているほどである。題名は、『混沌への道案内』、『6,000万人のママの子供たち』などが候補にあがっていたようだが、結局『機械の花嫁—産業社会のフォークロア』に落着く。

マクルーハンはこの本の冒頭で、ブルクハルトの古典、『イタリアにおけるルネッサンス文化』(1860年刊)をひく。「マキャベッリの方法の意味は、合理的な権力の操作によって、

国家を一種の芸術作品に変えることであった。」という文章である。少し短絡しているのではないかと思えるが、マクルーハンはこの文句を裏返して、だから「芸術分析の方法」が「社会の批判的評価」に適用できるのだ、と主張していく。「政治」が「芸術化」し、「芸術」が「政治化」して行く1930年代以降の特徴は、肌で感じているようだが、この人には、一貫して「政治」と「芸術」の目に見えない、複雑な諸関係を追求して行く視点、理論装置はない。ともかく、リーヴィスらが、詩、小説の読みと「現代文化」分析とを通底させて行った手法が、ここにも再現されている、という宣言である。しかし、全く『スクルーティニイ』などと同じ手法をアメリカにもって来ただけか、というと、そうでもない。

『機械の花嫁』について、後年マクルーハンはこう総括している。かれがケンブリッジで磨き上げた「文芸批評の武器を、広告業界、マジソン街の世界の新しいイコノロジーに適用するのは、たやすい仕事だった。しかし、時代は『機械化』の時代を通り超して『エレクトロニクス』の時代に入りこんでいた。それに気づかず、『機械化』だけを問題にしたのは間違いだった。」と、反省するのである。技術的にみて「機械化」と「エレクトロニクス」は連続しており、二つをかなり断絶させて対置するのは問題だと思われるが、リチャーズ、リーヴィス以来の手法で、広告やマンガを分析するのは、たしかに詩を分析するのよりはやさしかったと思われる¹⁷⁾。

それかあらぬか、この本、イギリスの新左翼系統に奇妙に評判が良い。たとえばスチュワート・ホールは、ポスト・モダンについての対談のなかでこの本に触れ、これがマクルーハンの書いた、唯一の「政治的本」だと評価した上で次のように発言する。「実際、マクルーハンはこの本に触れ、『マス・メディアの放出物に対する市民的防禦だ』と言っています。しかし、この幻滅はすぐ反対のもの、マス・メディアの賛美へ一転します。後の著作で、マクルーハンは全く反対の立場、ただ寝ころがって、メディアがその上を回転して行く立場をとる。かれは、最も激しく攻撃したものを、賛美しているのです。」と¹⁸⁾。

『機械の花嫁』まではよい、と言うのである。後段はやや単純すぎて同調しかねるが、「幻想」のマス・メディア賛美を、「現実」のメディア賛美と思わせたところに、マクルーハンの意図せざる魔術があったのかも知れない。

このシリーズについてマクルーハンは、「現代のアメリカにおける古代と近代の闘争」では、かなり皮肉ではあるが、かれの大嫌いだった「ジョン・デューイとシドニー・フック」の教育法に対抗させる必要もあって、余り表立った悪口は言っていない。こんな具合である。

「ハッチンスによって描かれる教育の目標は、市民（“Citizen”）をつくることである。市民とは、芸術と科学における百科全書的（非専門的）訓練をあたえられ、社会的、政治的生活に準備された、合理的な人間である。読むことと書くことの技芸に、格別に熟練していることが最も肝心である。市民はすべての事柄について弁舌さわやか、いや雄弁でなければならぬ。……」

そんなローマ・レトリックの理想のような、合理的「市民」の充満する世界がありうると、マクルーハンが思っていないのはたしかであるが、まだこの段階では、このような調子にとどまっていた。それが『機械の花嫁』の段階になるとハッチンス・プロジェクトへの評価はより鮮明に表現されるようになり、同時にそれを対抗軸として、『機械の花嫁』の存在理由を宣言することになる。

「今日の教育者に浮んで来る、先ず最初のことは、歴史上始めて、商業が新聞、ラジオ、映画……を通じて行っている、公衆教育の非公式（“unofficial”）プログラムが存在するという事実ではないのか。この教育の量にくらべれば、シカゴ大学のプログラムなど言うに足るものではない。しかし、ハッチンス博士は、なにかそれについて言っているであろうか。現代的で、ラディカルで、ヒューマニスティクな教育者として、かれはただ“偉大なる本”に集中せよと示唆するだけである。

他方、この本は、ハッチンス博士が困惑して背を向けている非公式の教育のある効用を提案し、照明をあてている。あの非公式の教育は、ハッチンス博士がスポンサーになっている公式の大論文よりも、もっとずっと微妙な物ごとである。もっと大事なことは、それが、わが工業世界における唯一の、自生的で自発的な文化を反映しているということだ。そして、われわれが過去の文化と有効に接触できるのは、この自生的文化を通してだけできるのだ。そうでなければ過去の文化と接触することは全くできない。

この『トリヴィアリティと宣伝の嵐』に対する唯一の現実的回答が、それらを綿密に検査することでコントロールすることだ、ということが、どうしてハッチンス博士に判らなかったのだろうか。……偉大なる本の研究は、過去と現在の、文化的条件の特殊性を十分に意識した上で、追求されなければならない。それなしでは、過去の芸術も哲学も、社会すらも理解することは出来ない。」

現在、自分に浸透している「文化」の理解なしに、どうして過去の「文化」の意味が判るのか、というマクルーハンの批判は、そのかぎりでは正当である。そして、ここで「非公式教育プログラム」などと呼んでいるものが、後のメディア、環境研究に拡大・移行してゆくわけで、視角、構図はかなり変容していくが、研究の対象は、ほとんど一貫していると言ってもよいだろう。「メディア・リテラシー」教育の先駆者として、ひどく持ち上げる人もいるが、そう言いたければ言ってもよい。

それよりも、ここで散ざんからかわれているハッチンス博士、改めて言うまでもなく、第二次大戦後、「社会的責任理論」という、ある種の規範理論を出して、アメリカと日本のマス・コミ界を領導しようとした「プレス自由委員会」の大立物である。「プレス自由委員会」とひどく論評的になるそのレポート類についてマクルーハンの公的発言はなく、また厳密にいつて“偉大なる本”シリーズと委員会の活動志向とは必ずしも同一ではないが、マクルーハンが、「公的」次元でしか活動しない「プレス自由委員会」をどう見ていたかは、

想像にかたくない。「プレス自由委員会」が、戦後マス・コミ研究の起点の一つになるとすれば、マクルーハンが「異系」に入って行く根拠は、この出発点から胚胎していたのかも知れない。

この本の意図とからむ方法について、説明しておかなければならない。エドガー・アラン・ポーの「メルシュトレムに吞まれて」(小川和夫訳、『ポオ小説全集』, III, 創元推理文庫)である。魔の大渦に吞み込まれた舟乗りの恐怖と、そこからの脱出を描く、いかにもポーらしい物語である。マクルーハンはとくにポーが好きだったと言うか、かれの特有のアメリカ史の見方のなかで、ポーを南部の代表に見立てていた。マクルーハンは、「エドガー・ポーの伝統」(1944年)、「南部的特質」(1946年)と題する二つの論文を、いわゆる「新批評」の雑誌に書いていた。

そこでマクルーハンは、ポーを、南部をふくめたアメリカ全体をおおう北部の産業社会の技術・文化に抗して、その内部に潜む、暗い、抑圧された集団的魂を描いたのだと位置づける。とくにマクルーハンが注目しているのは、北部の知識人、大かたは象牙の塔にこもってプラトンなどを読み、気晴しにテニスやブラウニングを読んでいる教授諸公であったのに反して、ポーが産業、商業活動のただ中で、その渦のなかで、マクルーハンのコンラッドをもじった名表現によれば「闇の奥」のどす黒い情念が逆まく中で苦闘した、ということである。

ポーの「メルシュトレムに吞まれて」の舟乗りは、「渦巻く壁に閉じ込められ、数多くのいろんなものがまわりを流れているのを見た時、『私は多分夢をみていたようになっていたのでしょう。私は下の泡に落下していくいくつかのものの速度が相対的に違うことを考え、面白がってさえいたからです。』、と言っている」つまり、舟乗りは、この大渦の構造、その運動方則を解明することで、この大渦から脱出するのである。われわれは、ポー、あるいはポーの描く舟乗りのように、まず「現代・大衆文化」という「大渦」のなかに身を投じ(そうしなくとも自動的に渦中にあるわけだが)、そのなかから、内部からそのメカニズムをつかんで、脱出するのだ、と言うのであった。

もう一つ、ポーを引照して言っていることは、「再構成」の強調である。

「ホームズはいう。『こうした種類の問題を解くにあたって大事なことは、背後に向って推理できることだ。』と。一世代前に、エドガー・アラン・ポーは、この『再構成』、あるいは後ろに向って(“Backwards”)推理する法則に触れ、それが、象徴詩と同じく、犯罪小説の基礎的技術であることを示した。」

現在ある「効果」(“effect”)から「原因」へ遡及して行くというのが、これまた以降一貫して変らないマクルーハンの基本方法となる。

新聞紙(というより正確にはその頁)のニュース配列の同時構成、首相の演説も、外国の台風も、場合によっては殺人事件も、みんな同一の紙面に並ぶというのもひどくかれの気に

入っていた手法であった。

「産業社会のフォークロア」というサブタイトルにも、注目しておくべきであろう。マクルーハンは、ある人類学者をひいて「民衆」が「民話の成立過程」に全く関係していないのと同様、現代の民衆も、スタジオ、広告代理店が作り出す欲望のフォークロア、夢のなかで眠っている。「集団的な夢」から醒めさせるのに、この本を書いたのだ、と言うのである。出来ばえは、全体として悪くはない。見本を一つだけあげておこう。表題と同じ「38・機械の花嫁」の一節である。

「ナイロン靴下に包まれた見事な2本の脚プラス自動車、男女の別を問わず、これこそ成功と幸福の処方として万人の認めるところである。そしてこのたぐいの広告は、人間のみならず統一体としての肉体からのセックスの遊離を表わすものであるばかりでなく、この奇妙な分離現象に一層拍車をかけているのである。……グラマー広告は“夢が歩くのを見たことがありますか”と問いかけ、広島に落とされた原爆はリタ・ハイワースにあやかって“ゲルタ”と命名される。」¹⁹⁾、二重の倒錯はなかなか細かに分析されているが、この本売れなかった。マクルーハンは、学生たちにただで配ったようである。理由は簡単に「民衆」が読むには、難し過ぎるからである。

第三章 イニス、メディア理論の構成 ——「時間」「空間」「バイアス」のトリアーデ——

マクルーハンの著作を評価する前提としてハロルド・イニスの仕事を見ておかなければならぬ。

イニスは1894年、カナダのオンタリオに生まれた。1916年、マックマスター大学で学位を取った後、第一次世界大戦に従軍、徹底して「産業化した戦争」の体験者であることに、注目すべきである。復員してからシカゴ大学で докторの学位をとり、トロント大学の政治経済学の教授を、1952年死ぬまでつとめた。以降、イニスは毛皮貿易、材木産業、タラ漁業、カナダと世界をつなぐ物的交通の「産業」研究に没頭した。当然のことながらそうした研究は「経験的」「実証的」——その枠内でシカゴ学派的と言ってもよいが——要するに普通の方法で遂行された。原史料を調べ、自らボートで川を遡り輸送状況を吟味したり、生産・流通に従事している各レベルの経営者・労働者にインタビューを繰り返す。こうした「産業・産業史」研究は、それなりに高い評価を受ける²⁰⁾。

このまま終りまで進んでもよかったのだが、イニスは1940年代から今までは大きく様相を異にする「文明史」的研究、「石、パピルス……」といった根源的メディア研究に、急激に転換して行くのである。イニスは、それまでやって来た物的交通の研究から精神的交通（コミュニケーション）の研究に上昇移行した、と簡単に言う人もいるが、この転換は、イ

ニス自身充分に説明していないこともあって、それほど簡単ではない。経済的「下部構造」分析から、イデオロギー的「上部構造」の分析に移行したというのなら、この転回は理解出来なくはないが、あいにくイニスにはマルクス主義の影響がほとんどないのである²¹⁾。

少くとも外部にはこの関心の移行は、唐突きわまるものに映ったようである。そのことを象徴するのが、イニスが招かれて行った1948年、オックスフォードでの連続講演(“Beit Lectures”)であった。ここでイニスは、「対話の消滅」が西欧文明没落の象徴、その自覚がヘーゲル風に言えば「ミネルバのフクロウ」だ、という思弁を語ったのである。イニスは、この第二次大戦終結後の時点で西欧デモクラシーの基礎と考えられた「対話」の消失とみえる現象(政治・社会の大衆化現象と対応する)を非常に気にしていたことは事実であり、そのことをここで率直に問題として提出したのであった。が、聴衆はフクロウが森に帰るように見るみる減り、ついには最前列の人しか残らないという惨たんたる光景を呈するに至った。恐らく聴衆は、この高名なカナダの「産業」史家からこんな話を聞こうとは、夢にも思わなかったに違いない。

イニスの1940年代の転回前後をつなぐものとして特に注目すべきなのは、「独占」(“monopoly”)という概念であろう。イニスはこれを経済史的意味だけではなく、「知識——社会的に流通する——の「独占」の意味に拡大し、その起源を探ろうとした。これが、ヨーロッパ国家権力の伝統ではないかと考えたからである。メディアの「独占」を志向すること。これを「時間」と「空間」の二次元にわたって検討しようというのが、イニスのプロジェクトであった。この側面は、結果的にであるがマルクス主義の、「支配階級思想」は「支配的思想」(『ドイツ・イデオロギー』)のテーゼに、似かよってくるといってもよい。ここに、イニスの構図が「技術決定論」、あるいはそうまで言われなくとも、メカニスティクな図式だといわれる根拠があるのかも知れない。

研究対象の移行で、イニスの仕事のスタイルが変わったのは事実であった。旅行し、フィールド・ワークでデータを集めるのではなく、文献を読む、つまりイニスは一種の啓蒙期歴史家——『ローマ帝国衰亡史』のギボン・タイプと言った方がいいか——にならざるをえなかった。無論、二〇世紀の後半では、かれの読むべき文献が個人の能力をはるかに超えているのは事実であって、狭い専門家からいろいろに文句をつけられるのは、いたし方ない。しかしそれは、イニスのヘーゲルの教養が生きているというか、今にいたるも壮大な眺めではある。

イニスは、エジプトの「帝国」から始める。かれにとってエジプトは文明の始源でもあるが、知識の独占を試みるものとして「帝国」(“empire”)とは、重要な概念であった。「帝国」は、一定期間存続した後、必ず崩壊する。イニスはその原因を、体制内に同化、吸収されないう、マージナルな周辺グループにみた。かれらが、新しい「知」を生産し、流通されるから、「帝国」は崩れて行くのである……。しかし、少し結論を急ぎ過ぎたようだ²²⁾。

かれの『帝国とコミュニケーション』（1950年刊）の叙述は、実のところそれほど明瞭ではない。現実の歴史は図式通りにはいかないということもあるが、イニスはこの本の始めて「文明」のなかの制度として「帝国」を位置づけた後、「コミュニケーションの効率性（“efficiency”）」という標識、「特定のコミュニケーション・メディアの効率性」に関連して、「帝国」を考察してゆくと宣言する。

イニスの意見だとペルシア「帝国」は、中心がなく、メディアの「独占」がなく、多数の宗教が共存していて「効率的」なのである。そこから言えば、「帝国」はゆるく、脱「帝国」化して行けば行くほどよく、「帝国」として固定してしまった時から、没落への歩みが始まるという図式になる。時間——空間という枠組が、ここに入る。

社会活動に応じた「主観的（質的）」時間意識の強調は、30年代から戦後にかけての社会科学の特徴であった。1936年に出たM・コーンフォードの論文「空間の発明」を、その代表にあげてもよいだろう。これは、等質な時間というニュートン（ホブズ）的観念が「空間」の概念を生み——ベルクソンの表現によると時間の空間化——それはギリシアの原子論者に始まることを論じたもので、当時広汎な影響をあたえた論文であった。アメリカでは社会学者ソーキン、マートンらが同様の発言をしており²³⁾、マートンらの著作をイニスがよく知っていたことは事実である。イニスの手法はややカント的ではあるが、この潮流を反映していることは間違いない。

ここでまた、イニス独特の概念「偏見」（“bias”）が登場する。時間の「偏見」と、空間の「偏見」である。西欧文明は、この二つの「偏見」の激しい衝突から生じた、とイニスはみる。この「偏見」のどちらかに傾く、行き過ぎることから、文明の変化が始まるというのである。

時間の「偏見」に支配されたコミュニケーション・メディアは、重く、大きく、巨大である。石に刻まれたヒエログリフの碑文を、イニスがしているように例にあげよう。厳密に言えば、媒体は二つ、石と文字である。石も持ち運ぶには労力と時間がかかるが、石に文字を刻むのも同様であり、またその文字の意味を習得するのにも時間がかかる。そのメディアは膨大な「時間」を消費するのである。適例は無論、エジプトである。こうした重いコミュニケーション・メディアを使用することは、当然運営を一部のエリート階層の手にゆだねることになり、かれらエリートは、政治、宗教的支配者として、「帝国」を固めることになる。

この「重いメディア」に対して、空間の「偏見」に支配された文化のコミュニケーション・メディアは、「軽い」ことになる。典型的な例としてあがるのが、「紙」と「アルファベット」である。重いメディアの耐久性はないが、軽いメディアは簡単に輸送可能であり、「アルファベット」型の文字は、習得にそれほど時間がかからない。周辺から歴史が変わってくる事例として、イニスは強大なエジプト帝国の周辺におけるアルファベットの発明、普及をあげている。軽いメディアで、支配できる領土の範囲は拡大し、軍事組織と、しだいに官僚制が発達してくる。軽いメディアは、マス・メディアの萌芽をはらんでいる。イニスの図式に

したがえば、基本的にヨーロッパ・アメリカの近・現代が、この「軽いメディア」の系譜に属することになる。だが、二つの「偏見」が衝突するところに文明のダイナミズムを見るイニスにとって、現代の評価は必ずしもよくない。「空間の偏見」はメディア間の自由競争、帰結として「独占」による知識の画一化する世界を招き寄せるからである。しかも、「空間」のバイアスは、粗野な「物質主義」を結果しやすい。

かれは、この「時間」―「空間」の公式でヨーロッパ思想史を分析し、「デカルトは数学を強調し、その非・歴史的気質は哲学を歴史から解放した。数学の理想は十七世紀を支配する……」。再び歴史がもどってくるのは、「ヘルダーとロマンチズム」からである、と書く。こうした説明でいいのかどうかは別にして、イニスがこの特異なメディア図式ですべての領域を「説明」しようと試みていたことは、事実であった²⁴⁾。

イニスにとって、この両極のバイアスのバランスが理想の状態をつくり出すのであり、そのためにオーラル (“oral”) な伝統の回復が必要なのであった。「対話」の復活がその鍵である、という信仰である。いま信仰といったが、そう規定するとイニスは怒るであろう。余り説得的ではないにしても、イニスには、口頭の、音の聴覚的メディアが時間の感覚を推進するという、「理論」があったからである。「話し言葉」、オーラル・コミュニケーションは、健康で活気のある文化を維持してゆくのに多くの効用をもっているが、その一つが各感覚のバランスを保つことだとして、イニスは一種の「バランス感覚論」をした。後年、マクルーハンが、全く違う道筋を辿って到達、理論的支柱とする場所である。

人間は、多感覚のバランスのとれた生活を送る必要があり、特にモラルの主体としてそれが必要だ、というのがイニスの見解であった。メディアは、特定の感覚を助長する。メディアの「独占」は、独占的「感覚生活」 (“sensory life”) を生む。この点で、「書くこと」 (“writing”) の支配は西欧文化に決定的なアンバランスをもたらした。そのことは「見ること」、視覚の優位をうみだし、他の感覚の働きをおとしめるからである。イニスはそれを「ヴィジュアル・バイアス」 (“visual bias”) とよび、「空間的偏見」にふずいして出てくるのだとしたのである。

この「ヴィジュアル・バイアス」への転換を象徴し、体現するものが、イニスにとっては新聞というメディア、その発展する世界であった。かれが行っている、新聞の影響についての批判、その後のマス・コミ研究での批判と、そう変るところはないので、とくに触れなくてもよいであろう。ただ注目すべきなのは、イニスはこの「視覚的偏見」が、カメラの発明、写真、映画の発達によって一層深化したとみることで、活字→映像への移行の積極的意味を、ほとんど認めないことであろう。イニスはその移行を、より深化した連続性ととらえ、非連続性は認めない。とくにイニスが攻撃しているのは、「フォト・リアリズム」という言い方に象徴される、カメラは現実を映す、嘘はつかないという大衆にしみ込んだ「迷信」である。この性質、大衆操作力があるから、映画は第二次大戦中、ナチス・ドイツの宣伝の武器に使

われたのだとイニスを見る。イニスの言葉でいえば、「ある意味では、ドイツ民衆の問題は、西欧文明の問題でもある。」

この「空間」の極への揺れをなおすには、やはりオーラル・コミュニケーション伝統を復活・再興する以外にはないのである。イニスの見解によれば、オーラルな、聴覚的・音のメディアの強化こそが「時間」の意識を促進して、この「空間」と「時間」の生産的バランスを回復することが出来る。

イニスがオーラル・コミュニケーションの優位性をどのようにみていたか、もう一度まとめてみよう。

イニスはここで、「前・歴史的」なオーラル文化、あるいは今でも存在する「無文字社会」の様相について言及はしているが、その方向へ向っての立ち入った考察はしていない。かれの構図からいえば、軸は二つなければならず、とくにオーラル・コミュニケーションだけの社会を分析する必要はなかったものと思われる。近年のヨーロッパ古代、中世における「リテラシー」研究は、オーラル・コミュニケーションの海のなかに浮ぶ「書き言葉」(文字)の島の、意味と役割との究明に向っているのであるが、その方向とは余り接続しないというか、イニスのコンテクストが少し違っていることは、見て来たとおりでである。

イニスは、このオーラル・コミュニケーションの伝統を次のように歴史的に分析していく。オーラル文化の支配的な時代にあっては、法律、モラル・コード、歴史……すべてが人間(語り部)の記憶のなかに貯蔵されていた。イニスはこれを、明らかにミルマン・パリイを使って、覚えやすい定型化した文句とドラマチックな話を連結する「叙事詩」の形で貯えられていたのだとみる。これは伝統的知識、記憶に頼るわけで、深部の構造で「時間」の感覚を強めることになる、というのである。

必要に応じて記憶から再生され、物語られる(“reciters”)わけであるが、話がドラマチックに出来ているから、語る者は必然的にその過程で「演技者」(“actors”)にならざるをえない。したがって聴衆は、語られたことの記憶を促進すると共に、語られるなかに感情移入して、今度は「語る人」に転化する。現代風に言うなら、「送り手」と「受け手」が容易に役割交換して、入れ替るということである。

イニスはこの観点から、聴覚メディアではあるが現代のラジオを批判する。それは、世界に向って語りかけるもので、「個人」に向って語りかけるものではない(もっとも、そういう擬似体験をおこさせる手法は、その後いくらかも開発されているけれども)。聴衆は受動性を強化するだけで、ラジオのオーディエンスは、ほとんど絶対アナウンサーにも、プログラマーにも、なることはできないのである。

第二の特徴づけは、イニスの、ニーチェ『悲劇の誕生——音楽の精神による——』の読み、に依拠している。そこには有名な、「アポロ的」「ディオニュソス的」という二大区分がある。「アポロ的」なほうは、人間と神々との断絶をみとめ、クールに、合理的に自然をコントロ

ールしようとする。これに反して「ディオニュソスの」なほうは、たとえ非合理的な熱情にかられても、自然と一体化しようとする。このニーチェ「解釈」には、当然異論もありうると思うが、イニスはこう読むのである。

オーラル・コミュニケーションは、この「ディオニュソスの」側面、共感的 (“empathetic”), 「ミメティック」 (“mimetic”) な要素を強める。イニスによれば、たとえば「討論」は相手の感情を考慮しなければならず、したがってパブリック・ディスカッションの盛行する社会は、「共感的」雰囲気を拓めるといっているのである。本当にそうか。われわれは、討論すればするほど分裂、対立がひどくなる事例を山とあげることができるが、イニス・テーゼの真偽といったことよりも、イニスの「オーラル・コミュニケーション」「対話」「討論」の理念がどのようなものであったかを、そこから読みとるべきであろう。

三番目にイニスが強調しているのは、オーラル・コミュニケーションが、意味の曖昧さ (“ambiguity”) を許容するということである。それは他人と平和的に共存して行くのに必要な条件であると同時に人間コミュニケーションの、ごく自然な姿態だと言うことになる。

イニスは1950年、ニュー・ブランズウィック大学の創立百五十周年を祝う記念講演、「時間への訴え」でも、ヨーロッパの「近代」が、道徳的に回復するには、空間への傾きを「チェック」して「時間」へ軸をもどさなければならない、と熱心に説いていた。ここで略述したメディア・コミュニケーション「理論」は、終生変らなかったとみてよい²⁵⁾。

が、イニスの後継者はマクルーハンしか見あたらず、少くともアカデミーの世界には定着しない。なぜであろうか。イニスの使う概念、「時間」「空間」「バイアス」といったものが、かなり特殊だったということはあろう。しかし、このぐらゐの変り様は、他にいくらかもある。イニスのこうした研究をする目的は、はっきりしていた。いや、はっきりし過ぎていた、と言ってもよい。「文明」救済、「現代人」救済の意図が、上に浮いて見えるのである。研究者というより、やや「使徒」に近づいている。ウェーバーのいう「価値中立」のアカデミーに嫌われたのは、このせいではないかと思われる。

第四章 「空間」の探求——「視覚空間」から「聴覚空間」へ——

『探求』 (“Exploration”) は、マクルーハンが人類学者のエドモンド・カーペンターと一緒に1953年に出した研究誌で、1957年までに年三回、1959年に終刊号を出している。人文、社会科学それぞれの垣根をこえた、まだそういう言葉はなかったが、「インターディシプリナリイ」な雑誌であった。執筆者は多彩でH. J. チェイター、ノースロップ・フライ、ピアジェ、ギディオオンから、小説家のボルヘスまで入っていた。

マクルーハンにとって、「空間」意識といえよいか、感覚といえよいか、「空間」への関心がこの研究誌の進行と共に、しだいに明らかになってゆく。ウォルター・オングも

「ルネッサンス象徴主義における空間と知性」(4号)を書いているし、ピアジェも「子供における時間と空間概念の発達」(5号)を寄稿している。

しかし、マクルーハンの「空間」概念形成にもっとも大きな影響をあたえたのは、この時期の協同者カーペンターの「アイヴィリック (Aivilik) エスキモーの空間概念」(5号, 1955年)であろう。この論文は多くの事例をあげて、空間の認識が絶対的なものではなく、文化によって違う文化的構成物であることを論じたものだった。マクルーハンは、この空間認識と、かれの「聴覚的空間」(“acoustic space”)とは、全く同じではないにしても、近似したものとしてとらえるのである²⁶⁾。かれは『ゲーテンベルクの銀河系』ではカーペンターのこの論文を引きながら、この「空間的形態, 方向に対する非視覚的態度」, 「多様な方向」を持った空間のオリエンテーションは、聴覚的、あるいは耳の「空間」と同じだということになる。イニスからあたえられた歴史的展望が、ここで文化人類学的な裏付をえたように、マクルーハンには思えたのであろう。

マクルーハンが、この『探求』誌の諸論文からえたものは、大きく次の二つに要約することが出来る。

(1) 活字文化は、人間の統一した感覚を分離させ(エリオットのいう“dissociation of sensibility”), 眼によって構成された空間の一形態しか認識させない。『ゲーテンベルクの銀河系』の表現でいえば、「すべての他の諸空間が不透明で扱いにくくなるのは、正にこの一種類の空間しか認識しないという、この習慣によるのである。」

(2) このエレクトロニック・メディアが推進している「眼」から「耳」への移行は、「視覚空間」(“visual space”)から「聴覚空間」(“acoustic space”)への転換であり——そのことが判らない、バカ・アホウ学者も多いが——後者の空間は「ダイナミックで、たえず流動している」のである。その大きな移行過程で電子メディアは逆進して、活字以前の社会の諸価値を、別な次元で復活している。だが、決して単なる口頭文化への先祖返りが企てられているわけではないことに、注意すべきであろう。

ここに来て、マクルーハンの基本的歴史構図の骨組は、ほぼ完成していると言ってもよいだろう。それと同時に、マクルーハンがイニスの構図を、脱け出ていることも明らかである。イニスは前にみたように、時間「バイアス」と空間「バイアス」の拮抗・闘争のダイナミズムを、メディア・歴史推転の動力とみなしていた。マクルーハンはイニスの図式に多く負いながら、ここに来て歴史(メディアのと言った方がよいか)を「空間」生産の歴史に置き直す。経過する段階をやや図式的にいうなら、「oral」→「scribal」→「typographical」→「acoustic」、となるであろうか。イニスの図式をこのなかに組み込まれて、歴史図式としては、より整然としたようにみえる。この点では、口頭文化の優位性を信じてやまないウォルター・オングの方が、ある意味ではイニスに忠実だといえないことはない。

しかし、果してそうであろうか。それが大きな問題であるが、そこに行く前に、聴覚空間

の特性としてマクルーハンがこだわる「同時性」(“simultaneity”)という概念に触れておかなければならない。「同時性」というのは元来エリオットの美学²⁷⁾にとって重要概念であり、「過去」が層をなして「現在」を構成していると言う歴史の連続性を指す用語であり、むしろ時間概念なのであるが、マクルーハンはこれを換骨脱胎して、情報が光の速さで瞬時に伝達されるということで、時間の連続としての歴史を消しさる方向に使うのである。かれは、未来派ではないが、余程このスピードが気に入っていたとみえ、あるいは過去を遠く距離をおいたものとして表象する、活字文化の「直線的モデル」を攻撃する余りか、「どこでも、どの時代でも、ここ(“here”)と今(“now”)になってしまった。われわれのニュー・メディアが歴史を廃止してしまった。」とまで書く。だが、多くの言葉を費さなくとも、時は停まるわけはなく、やはり「歴史」はあるのではないか。

マクルーハン自身も認めている、『ゲーテンベルクの銀河系』への影響をあたえた論文を、もう一つあげておこう。1959年に出た、J.C.カロザースの「文化、精神病理学と書き言葉」(J.C. Carothers, “Culture, Psychiatry, and the Written Word”, *Psychiatry*, 1959, 4.)である。この論文は、「ある社会におけるリテラシー、あるいはその欠如が、人びとの精神の形成、これらの精神的損傷の型に重大な役割を演ずる」ことを、アフリカ人とヨーロッパ人とのサンプル・グループの比較によって、証明しようとした。カロザースは、分裂症のような精神病理現象は、アフリカにはみられず、リテラシーと結びついているなどのデータをとり上げ、こう結論した。

「ヨーロッパの子供は早くから……時・空関係、原因—結果の連鎖として、そうした用語で考えられるよう制約する、多くの項目、出来事を導入される。アフリカの子供はその代りに、より一層話された言葉に頼った教育を受ける。話される言葉は、比較的高いドラマと感情を担っている。」

つまり、カロザースによれば、「農村のアフリカ人は、大部分音の世界で生活している。……ところが西欧人は、より大きく、全くかれに無関心な視覚的世界(“visual world”)に生活している。そうした違いが、思考の発達について基本的な重要性を持っているのである。」

まさにマクルーハンにぴったりの「実証」であったが、これによりかれの「音の世界」の重視、反作用として「機械化」と「リテラシー」「活字文化」を同一視するかれの理論枠は、一層固着してゆくと思われる。マクルーハンが、いろいろな意味をこめて、『ゲーテンベルクの銀河系』は、「イニスの脚注でしかない」と言う有名な言葉を残したものだから、しばしばイニスとマクルーハンは同一視される。共約点も多いが、かなり違ってもいることは、上に二、三示した通りである。『ゲーテンベルクの銀河系』をとって、草稿(“manuscript”)文化から、活字文化への移行過程分析をみてみよう。

すでに中世でも、「書き言葉」が商業的・教育的「機構」のなかに組み込まれていたことをマクルーハンは認める。しかし、近代のように「視覚メディウム」として機能しなかった

のは、もっぱら読むことが、近代以降のように「黙読」ではなく、声をあげて読む「音読」だったからだ、とマクルーハンは見るのである。この文化は、今われわれが「第三世界とよんでいる地域と同様」広い範囲の多様な方言の存在を許容した。

これに反して、設備をととのえるために、巨額の投資を必要とする活字印刷「工房」は、製品を出来るだけ多く売らなければならず、言語の標準化、画一化を推進する。したがって、綴りを統一し、語の形式的定義をし、辞書が必要になる。すべてが、中心に収斂して行く構造になる。マクルーハンは、十二、十三世紀の俗語文学を検討しながら、それらがみな地域的特性をもっており、センターは分散して、「中心一周辺」といった構図を作らないことを強調する。「テキスト」も地方ごとに違い、テキストを読む、文学的経験も、全く違うとみるのである。ここでマクルーハンは、モンタージュの手法か、人をおどろかす例をあげる。ジョイスの『フィンネガンズ・ウェイク』である。現代社会の「視覚的」性格に気づいていたジョイスは——そうであるかどうか、怒る批評家もいるだろうが、マクルーハンの解釈——わざとふつうでないスペリング、自己流の単語を使い、「聴覚的」世界を、再創造しようとしたのだと言うのである。

テキストが公開の場で朗読されたということは、中世の「著者」とか「所有者」という概念に、近代以降とは違った意味をあたえる。当時の教育の慣行として、読まれた「テキスト」を暗記した学生がいるとしよう。かれが記憶を再生してコピーを作成し、それを他人に売ったとしよう。中世では歴史的に珍しい事例ではない。その時、この学生は、消費者であり、生産者でもあり、読者でもあるが発行者でもある。まして、かれがコピーを作成する過程で、頭の中の「テキスト」に、なにかをつけ加えたり、削ったりする可能性は大いにあるわけで、オリジナル——コピーといった固定した関係は崩れ、流動化して行く。だいたい、著作がオリジナリティをもった「私的所有物」だといった、近代的観念はこの地平からは出てこない。

そのように抽出・構成したつもりであるが、この「活字」へ収斂して行く進行方向を「電子メディア」で逆行させる、単なる逆転ではなく、別次元のユートピアへ還って行くという構想が仕上がった時、マクルーハンの「理論」は、ほぼその全容をあらわす。その意味ではこの『ゲーテンベルクの銀河系』で、その舞台装置の土台は、もうほとんど準備されている、と言ってよい。

マクルーハンは続けて、「黙読」がなにをもたらしただかの考察に入っていく。活版印刷は、単語の間、行間を開け、スペースを広くとって、朗読するよりも早く黙読することを可能にした。黙読の急速な普及は、「見ること」と「聞くこと」を切り離す。マクルーハンはそこまでしか言わなかったが、弟子のウォルター・オングになるともっとはっきり、密室の「黙読」は一種の「内部の言語」を生み、新しい種類の「孤独」を生じる、とまで言う。その「孤独」が、近代の病いとみられていることは言うまでもない。

マクルーハンは、まだこの段階では、うまく接合されていないが、ここに「空間」概念を入れようとする。

「アルファベットの発明は、車の発明と同じく、複雑で、有機的な、いろいろな空間の相互作用を、一つの空間に翻訳、あるいは還元してしまった。表音アルファベットは、同時にすべての感覚を使っていたオーラル・スピーチを単なる視覚コードに還元してしまった。」と述べるにとどまる。

どの「空間」を使うか、構成する「空間」のどれがいいのかの根拠を、人間内部の感覚のバランスに求める志向はこの頃から明白だが、まだ「感覚論」「空間論」「メディウム論」は、相互に滲透していない。これに人間の内部が外に投射するという思考が加われば、マクルーハンの後の思想は、ほぼ射程に入ってくる。この関連で一つ置いて置かなければならないのは、この時期の「外化」（ある場合にはメディウムの別名である）が、全く悲観的にとらえられていることであろう。マクルーハンの手紙の一節を、引いておこう。

「今や、エレクトリシティによって、われわれの感覚のすべてが外化されてしまいました。われわれは、なんの共通感覚（“Sensus Communis”²⁸⁾）も持たないという絶望的情况にあります。……アリストテレス以来、共通感覚の伝統的役割は、各種の感覚を他の種類の感覚に翻訳し、そうすることで精神に、いつでも統一した、全体的なイメージを提供することになりました。……」

嘆きはまだ、まだ続くがもういいだろう。どうしてこのペシミズムがオプティミズムに転化するのか。希望と絶望は紙一重であるが、その過程が第II部の課題である²⁹⁾。

最後に、マクルーハンからの「主流」モデルについての批判、必ずしも代案を出していると言うわけではないが、について述べておこう。かなり挑発的といえ人を用意以上に感情的にならせるような「批判」であるが、それはマクルーハンの、いつもの語調である。あわせて、かれが誤解される理由の一つ、特有の論理の型について触れておく。

第五章 マクルーハンの「正系」への批判

——コミュニケーション・モデルと「効果」論——

マクルーハンがマス・コミ研究の「正系」から疎外されて行くには、いくつかの政治的・社会的理由があるが、ここでは「理論的」（それだけを抽出するのは、実のところかなり難かしいが）理由を二つだけあげて置こう。

一つはマクルーハンの難解な文体である。かつてこの国では詩人谷川雁が「難解王」を自称したが、独特な文体と言ったほうがいいかも知れない。『メディアを理解する』に触れたある批評家が、「20頁以上は読めないシンタクス」と評したあの文体である。マクルーハンは、こうした批評にコミュニケーション論で答えている。

「われわれは環境を共にすることが出来、天気を共にすることが出来、文化のあらゆる種類の要素を共有することができる。しかしコミュニケーションはごく不十分にしか起きず、理解されることは滅多にない。誰であれ、私のコミュニケーションの欠如について文句を言う人は、少しばかりナイーブなのではないか。実際、人間同志の関係では、おたがいに理解し合うということは、ごくまれにしかないのである。」

そんなにコミュニケーションが難かしければ、なぜ文章など書いて公表するのか、ということになるが、なかなか強気な発言ではある。昔、「誤解する権利」と言った人がいたが、「権利」もなにも、マクルーハン風にいえば、「誤解」するのが、ごく普通のケースだということになる。マクルーハンは「コミュニケーション」を、経験的に非常に稀少な事例として設定する。ここでは、「理解」(相互理解)の次元に規定が置かれているようだが、相手のメッセージの意味をどの程度共有するかという問題にかぎってみても、「完全な」理解はなかなか難しい、厳密に言えば、ほとんど不可能に近い、と言えなくはない。

マクルーハンは、先の引用に続けてかれのコミュニケーション観を全面的に展開する。

「コミュニケーションは慣習的な意味では、どんな条件の下でも難しい。人びとは他人と共感しようと思う時には、一緒に煙草をすうか、呑むことをえらぶ。そこには、いつでも、言語的手段によるよりも、おおくのコミュニケーションがあるのだ。……コミュニケーションは、いつでも起っているなにかノーマルなものだとする一種の幻想が、われわれの住んでいるこの世界にはある。……現実に、コミュニケーションは極度に難しい活動だ。人びとの間に、言われたこと、なされたこと、考えられたこと、感じられたこと、についてただの一つでもいいから連関があるという意味に考えても——このことはこの世界では、滅多にない。

もし、その人びとの間に、ほんの少しでも触れるとか、同意するとか、情報と関係のない領域があれば、それは大きな意味でコミュニケーションだ。完全に同一化するという観念は、考えられない。大半の人びとは、言われたこと、理解されたこと、なにか対応 (“matching”) が、コミュニケーションだという観念をもっている。現実の事実として、コミュニケーションは作られつつある (“is making”) ものだ。見たり、気にしたり、聞いたりする人間は、ほとんどがかれ自身のフィクショナルな発明による状況への反応を試みようとする仕事に従事しているのだ。」(ジェラルド・スターンとの対話, (ed), G. E. Stearn; McLuhan: *Hot and Cool: A Critical Symposium*, 1967, Dial P.)

コミュニケーションをほぼ完全な相互理解が達成される瞬間、恐らく自己と他人とが融合するかと思える、生涯に数えるほどしかない場合に限定してとらえるのは、ヤスパース、メルロ・ポンティなどの哲学系統にあり、かならずしもマクルーハンの専売というわけではない。だが、そこにみられるのは、マクルーハンのいうように自ら作り上げたフィクション群への乱反射でしかないとしても、理想的な相互理解はありようがなく、ごく部分的相互理解、

あるいは大きいのもあれば、小さいものもある、無数の相互「誤解」の渦の中で、この世界の日常生活は運行しているのではないか。そうした雑多な相互交渉を現実的に「コミュニケーション」とよんで、なにが悪いのか。どうしてマクルーハンは、理念的に高く、ほとんど天上の世界にコミュニケーション概念を設定するのか。

基本的理由は、マクルーハンがコミュニケーションを一種の形成過程にあるもの、相互につくり合う、理念的な「対話」原型に接近するもの、としてとらえたがっていることであろう。とすれば、そこからは多かれ少なかれ、主観的な状況認識が、すりあわせれ、衝突することで客観化されてゆくプロセスが、判り易くいうならゴフマン、「場」のコミュニケーション力学分析、といった地平へ脱け出て行く道が開けてくる。しかし、マクルーハンはこのコースはとらずに本題へ、かれの散文が難解な理由へもどってゆく。

「私が座って、複雑な問題について書こうとする時、……私はいくつかの次元を渡り歩き、よく考えた上で、多様な次元 (“multi-level”) をもった散文をつくる。これは芸術的形式である。」

「芸術」といわれては、私のように非「芸術」的文章ばかり書いている人間は、黙って引き下がる以外にないが、詩、あるいはジョイスが小説を書く時のように、書いているのだ、と言うのである。出来るだけ多層次元の意味をもち込もうとしているのだ、簡単に判ってたまるか、というより、解説には読者のほうでも、それなりの努力——参加——はしてもらいたいということだろう。

しかし、このコミュニケーション「論」、送り手の多次元の視点（あるいは、メッセージの多次元にわたる意味）を前提にする時、マス・コミ研究の「主流」が基本前提にするシャノン・ウィーバーの図式、あるいはラスウェルの五段階図式（送り手・メッセージ・メディア・受け手・効果）は、猛烈に攻撃されることになる。マクルーハンにとって、「送り手」と「受け手」が、滑らかに同一次元に並ぶという構図が、耐えられなかったようである。コミュニケーションを、単なる輸送 (“transportation”) の一種としてしか見ていない、という批判である³⁰⁾。

とくにマクルーハンが反対したのは「ノイズ」（雑音）の排除、それを出来るだけ少なくすることがシャノン・ウィーバー図式の目標であったが、である。

「かれら（シャノンとウィーバー³¹⁾）が『ノイズ』とよぶものを、私は『メデイウム』とよぶ。——それは副次的効果のすべて、意図されない型と変化のすべてを指している。かれらのモデルは電信から来ており、かれらはそれを、単なる一種の輸送のためのパイプラインとしてしかみていないのだ。」

かなり潰滅的な批判であるが、シャノン、ウィーバー、ラスウェルの徒にも反論はあろう。筆者のほうで構成してみると、大略こうなるか。「送り手」の意図が、しばしば「受け手」に誤解されるのは、日常多くあることであるが、だからといって「送り手」と「受け手」の

間をつなぐ「メッセージ」(伝達されるコンテンツ)を仮定しないで、どう客観的に分析を進めようというのか。また、現実の多くの夾雑物を取りのぞき、捨象して出来るだけ簡単なモデルをつくるのは研究上当り前の手続であって、そうでなければ「モデル」として機能しない。「モデル」を、混沌たる現実にはき戻して、なんの得があるか。マクルーハンは、自分のコミュニケーション観の方が日常現実の世界に近いというようなことを言っているが、それぞれが自分のフィクションをかかえた原子的個人がぶつかり合う光景、コミュニケーションの世界などという図式は、それこそマクルーハンのような一部知識人の「幻想」でしかない……。といった方向になろうか。「構成」してみせたのは、アカデミーの側からの反批判、討論がほとんどなかったからである。

それに関連しているもう一つ重要な論点は、マクルーハンの余りに有名な「メディアはメッセージである」というテーゼである。マクルーハンは「主流」の図式のように、「メディア」と「メッセージ」を、人工的に切り離すことを認めない³²⁾。ばかりか、マクルーハンはこのテーゼを楯に、メディアにのった「内容」(メッセージ)だけを調査して、その「効果」を吟味する定型化したマス・コミ調査群を、ウィルバー・シユラムなどの名前をあげて嘲弄した。そんな調査をして、なにが判るのか。「メディア」それ自体が効力を持っている以上、そんなことをしてもなんにもならない、と言うのである。言うまでもなく、戦時宣伝の効果測定から始まり、第二次大戦後、広告産業の効果測定に引き継がれる「効果」研究は、研究機構のなかでも大きな地位を占めて来た。マクルーハンの発言は、これに対する正面からの爆撃といってもよかった。にもかかわらず、マクルーハンのほうが、広告産業のアイドル的存在になるという逆説的事態もあってか、これもコミュニケーション図式と同様、基本的には無視されてしまう。むしろ、ウムベルト・エーコが、マクルーハンの「内容」無視は、かえって「メディア」の技術的基礎を見ないことになるのではないか、という批判をしているのが、今となっては目に立つぐらいのものである。

この場合はマクルーハンのほうにも、弱味がないことはなかった。「メディア」「メッセージ」と一緒に融合した「効果」を測定する有効な方法が、どこにもなかったからである。明瞭ではないが、ある場合には、「メディアの効果」は「無意識」領域のものだとマクルーハンは言っていた。そうかも知れないが、どちらにしても「無意識」では、定量化するわけにはいかない。そのことについてはまた後で触れることになる。

マクルーハンのテレビジョンの「流れ」についての思考を、もう少し追ってみよう。かれは、情報、メッセージが「流れる」(“flow”)という考え(イメージと言ってもよいか)に、激しく反対した。「もっと言えば、電氣的『放出』とエネルギーについてよりよく知られるにつれ、電気のことを電線を通して来る、なにか水のように『流れる』もの、あるいは電池のなかに『入っている』もの、のように語る傾向はより少なくなってきた。むしろ、最近の傾向では、画家が空間のことを語るように、電気のことを語る。即ち、二つ、あるいは

それ以上の身体の特定の位置をふくむ可変的条件として語るのである。」

画家はその対象が特定「空間に包まれてある」わけではないことを、ずっと前から知っていたわけであるが、絶対空間がないと言うことは、元来数学者の世界から意識されたこととして、マクルーハンは大好きなオックスフォードの数学者の例を出す。ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』である。「そこでは、ルネッサンス的パースペクティヴの確立に來ずずっとそうみえたように、時間も空間も、決して斉一的でもなく、連続的でもない。」

と、マクルーハンはそこからまた「空間論」へ脱け出してしまうわけだが、その脱出路はともかく、「流れ」というメタファーが、ウィーナー、サイバネティクスの機能主義を連想させるのか、マクルーハンはやや偏執的にこの表現を排撃していた。この関連では、テレビジョンは「流れ」(“flow”)だと強調したイギリス新左翼のレイモンド・ウィリアムスも、はじかれることになる³³⁾。もっともウィリアムスの力点は、視聴者の経験にあったわけで、特定の番組だけを見る人はごく少なく、大かたはニュース、クイズ番組、ミステリー……と「フロウ」のなかで見る、だから特定の番組だけ調査しても、出てくる「結果」はどうであろうか、というところにあったわけで、案外マクルーハんと共通した側面がないわけではない。

ずっとマクルーハン「主流」理論の前提に対する攻撃をみて来たが、マクルーハンが学界から疎外される理由は、それだけではない。「理論」の構成に関する内部的理由だけではなく、そこには多くの外部的、やや表面的理由もあった。その二、三にも触れておく必要がある。

マクルーハンの文章の独自のスタイル、「擬似科学」と言われるゆえんを、もう少し掘りさげておこう。

マクルーハンは「電信が内乱(南北戦争)をつくった」、といった人をおどろかす警句を連発した。「信者」には一種、魅力のある表現であろう。マクルーハンのメディア理論を全面的に受け入れ、いくつかの迂回路を辿って説明されればこのテーゼ、判らないことはない。が、ふつうに読めば「電信」が内乱を製造したなどと言うのは、歴史的事実として、全くのナンセンスでしかない。

また別な例をあげれば、かれは『ゲーテンベルクの銀河系』で、シェークスピアをよく引用している。

「静かに。あちらの窓を通して、どんな光が入って来るのでしょうか。それは話していますが (“speaks”), けれどもなにも言っていない (“says nothing”).」

かれはこの台詞を、過渡期にあったシェークスピアが、活版印刷の形式的効果を意識していた証拠として引用するのである。そう「解釈」していいかどうかは別にして、こうした詩のたぐいの引用は、『メディアを理解する』のいたるところに、散布されていた。これもマクルーハンは、理解を助ける、気のきいた「面白さ」として、意識的に多用していたようである。がこれも、反対の「研究者」に言わせれば、我慢のならないペダンティズム、第一こ

んな引用が、なんの「証明」になるのか、ということになる。

もっと深部の構造でいえば、その底にはマクルーハンによる「類推」(“analogy”)の使用があると思う。

これは言うまでもなくかれのトミズム、トマス・アクイナスから来ている³⁴)。アクイナスは、神について語る時も、日常世界の事物を扱っている「日常言語」(“univocal”な)、人間の言語でしか話しようがないことを、指摘する。かれに言語が、ユニボーカルな単一の意味で使われる時と、多義的で「曖昧な」意味で使われる時とを、区別する。アクイナスのあげている例をみたほうが、話は早いだろう。

「神は賢明だ」というのと、「ソクラテスは賢明だ」というのでは、同じ「賢明だ」という言葉を使っても、神と人間のあいだには越えがたい深淵があり、全く別次元の存在である。しかし、人間は「人間の言葉」を使うしかないし、また使えるのだ、というのがアクイナスの主張であった。二つの存在の間に一定の割合(“proportion”)の共通点があれば、それは相似形的構造にあり、「類推」的言語の使用は可能だとしたのである。

もう一つ、アクイナスの使っている事例をあげておこう。「健康的」という形容詞である。それは「食事」にも、「顔色」にも使うことが出来る。前者は「健康」の原因であり、後者はその徴候で、これも全く次元が違うわけであるが、ある程度の「類似性」(“similitude”)をもっている。それがあれば、これも同じ言葉を使ってもよい。それはユニヴォーカルでも、エクイヴォーカルでもない、中間の言語使用だというのであった。

アクイナスは、パウロの「ローマの信徒への手紙」の一節、「世界が造られた時から、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現われており……」(1:20)、をひいて、自説の根拠づけにしていた。聖書の引用は、ここでのわれわれの関心事ではないが、「アナロジー」の大前提は、元来被造物の完全な形は、創造の時神のなかにあり、すべてはそこへ還って行くという思考であった。マクルーハンには、超越の世界を現実世界に還元する必要もなく、またメディウムのアイデア化を構想したこともない(それに似た志向はある)のに、なぜか、このアナロジーを多用した。

すべてを説明するものではないが、一つの想定を書いておく。マクルーハンは1940年代後半から、「水平的」(“horizontal”)、「垂直的」(“vertical”)という二項対立の概念が好きで、よく使っていた。言うまでもなく、ふつうの学界用法では、コミュニケーションの流れが「垂直的」→「水平的」に転換するのを、中世から近代社会への移行の標識に使っていた。かれは、この対置概念を拡張して思考の型にし、「推理」は「水平的」で、「直覚」は「垂直的」、アリストテレスは水平的で、プラトンは垂直的だ、などと言っていたらしい。この脈絡が一方では「直線的」、「同時的」の対項に変形して行くと思われるが、もう一方は、このアナロジーの多用に結びついてくるのではないか。

起源はともかく、マクルーハンが論理の一種として使っている「アナロジー」が、読者に

は単なる文学的「メタファー」(“metaphor”)として受取られるという矛盾である。そして、マクルーハンの、特に後期のアナロジーが、少くとも半分は、思いつきのメタファーに墮していることは、なにか人をおどろかす、新奇なことを言わなければいけないという意識が勝ちすぎたのか、ある程度認めなければなるまい。

注

1) (eds). Stephanie McLuhan, David Staines; *Understanding Me: Marshall McLuhan*, 2003, MIT Press.

2) Glenn Willmott; *McLuhan or Modernism in Reverse*, (7. Postmodern Mask), 1996, University of Toronto Press.

Hugh Kenner; *A Sinking Island : The Modern English Writers*, (7. A Pocket Apocalypse), 1987. The Johns Hopkins University Press.

なお、1995年から2000年の間、メディアで言及された知識人（この範囲が問題だが）の数を調べた表によると、マクルーハンは、(1,446回)で、かなりいい線をいっている。トップはキッシンジャーである。

Richard Posner; *Public Intellectuals: A Study of Decline*, 2001, Harvard University Press.

3) (ed). Raymond Rosenthal; *McLuhan: Pro & Con*, 1968, Funk & Wagnalls.

4) この本、現代の思想家を扱ったシリーズの一冊で、その総編集責任者はフランク・カモードであった。マクルーハンはカモードに「抗議」の手紙を送り、いろいろなことを言っているようである。その事情はカモードが書いている。

カモードはフーコー、ついでデリダの流行が、マクルーハンの退潮を招いたのだ、とみている。かれは、マクルーハンのいくつかの基本テーゼには反対であったが、全体としては割合と好意的だった。1965年1月24日、BBCで「対談」もしている。

Frank Kermode, “Sic Transit Marshall McLuhan”, in *The Uses of Error*, 1991, Harvard University Press.

“The Future of Man in the Electronic Age”, in *Understanding Me*, pp. 56-75.

またかれの宗教を問題にするある評者はやや意地悪く、マクルーハンの「エレクトロシティ」、「メディアウム」、「グローバル・ヴィレジ」は、「聖霊」、「神」、「ローマ」の言い換えだと言っている。だが、無意識の最下層にはそれがあっても知れないが、決して後年の「理論」形成では表には浮び上ってはいない。

Andrea Huyssen; “In the Shadows of McLuhan: Jean Baudrillard’s Theory of Simulation”, *Assemblage* 10.

また、「活字」から「電子メディア」への移行を、宗教的意味で人類の救済と等置しているという意見については、

Gary Genosko; *McLuhan and Baudrillard; The Masters of Implosion*; 1997, Routledge.

5) Janine Marchessault; *Marshall McLuhan: Cosmic Media*, 2005, Sage Publications.

6) *Journal of Communication*, vol. 31, No. 3, 1981 “The Living McLuhan”.

『大航海』, No. 17, 1997.

この関連で一、二論文をあげておけば吉見俊哉「メディアの変容と電子の文化」、『思想』、1992年7月号。

飯塚浩一「情報社会の理論的課題に関する一考察——『社会情報論』的アプローチとマクルーハン理論の可能性——」、『東海大学紀要文学部』、第65輯、1996年。

7) Robert E. Babe, "McLuhan and Canadian Communication Thought".

マックファースンの (private property) がイニスのいう「空間」バイアスとかかわり、対項としている (common property) が、「時間」バイアスと関連すると言うのである。そこまで拡張すれば、2項対立の図式は、みなイニスだということになる。

この論文は、以下の本に収録されている。この本はカナダ政府から補助金を受けて刊行されている。

(eds). John Moss, Linda M. Morra; *At the Speed of Light There Is Only illumination: A Reappraisal of Marshall McLuhan*, 2004, University of Ottawa Press.

8) その視点を全面的に扱ったものとして

Donald F. Theall; *The Virtual Marshall McLuhan* (with a historical appendix by Edmund Carpenter), 2001, McGill-Queen's University Press.

クリストファー・ホロックス・小畑拓也訳『マクルーハンとヴァーチャル世界』、ポストモダン・ブックス、2005、岩波書店。

文：テレンス・ゴードン／絵：スーザン・ウィルマース・訳宮澤淳一『マクルーハン』、2001、ちくま学芸文庫。これにある「文献目録」はよく出来ている。

9) Philip Marchand; *Marshall McLuhan: The Medium and the Messenger, a biography*, 1998, MIT Press.

Canada Council の援助を受けている。筆者は60年代の終り、トロント大学でマクルーハンに習った経験をもつ。

もう少し前のゴルドンの伝記も、マクルーハン家の全面的協力をえて、残された日記、ノートなどを調査しており精度の高いものになっている。ゴルドンも60年代半ばトロント大学でマクルーハンの講演を聞いているが、すでにその時期“Seer”, “Guru”, “Sage”のレッテルが貼られかかっていたことを、証言している。伝記的事実は、多くこの二書と (eds). M. Molinara… “*Letters of Marshall McLuhan*”, 1987, Oxford に負っている。

W. Terrence Gordon; *Marshall McLuhan: Escape into Understanding, A Biography*, 1997, Basic Books. A member of the Peruseus Books Group.

10) マクルーハンにとって、口頭コミュニケーションは、特別な意味をもっている。ただしそれが「対話」として成立していたか、どうかは別の問題。

かれにとって「私は書く前に終りのない対話に従事する」「私は書こうと思う主題について繰返し、繰返し話しておきたいのだ。」

そこには書くことよりも「もっと活気があり、もっと面白く、もっとドラマがある」, 「ほとんどの人は話すことを、思考の結果として使う。しかし、私は過程として使うのだ。」

40年代にマクルーハンに最も近かった院生、ヒュー・ケンナーは「マーシャルがいつも必要としていたのは引き立て役である……私はかれが口に出して考える時に、部屋に誰か他人がいることを好んだのだ、と思っている。」

かなり辛らつな、いささかの悪意も感じられないことはない証言。

- 11) この時期ケンブリッジ「文芸批評」については、
拙稿「『読書層』(Reading Public)と『リテラシー』(Literacy)のあいだ——イギリス出版史研究点描」、『出版研究』, No. 17, 1986年3月。
「『読むこと』の意味——1920年代イギリスにおける『コミュニケーション』研究展望」、『コミュニケーション科学』, 9号, 1998年10月。参照。
- 12) マニトバ時代からチェスタートンには親しんでいたという説もある。かれ自身の回想だと、この時代に読んだカトリックの哲学者マリタン (Jacques Maritain), とくにその『芸術とスコラ哲学』は、エリオットの詩と同じで——私には少しく判らぬ——重大な影響を受けた、と言っている。
- 13) ベラン神父 (Gerald Phelan) によって教会に受け入れられるのは、1937年3月25日。母親は宗教的理由よりも、北アメリカの学界ではカトリックは不利なのではないか、と現実的なことを心配している。
- 14) もうこの時期、太平洋での戦争は始まっているわけだが、マクルーハンはルースベルトの“四つの自由”演説など、徹底して信用していない。いっそ、みごとなほどであって、無論兵役にとられないかと恐れているが、この人の非「政治性」はかなり本質的である。
- 15) *The Mechanical Bride: Folklore of Industrial Man*, 1951, Vanguard Press. 1968年にボストン, Beacon Press から新版が出ている。この本、ずっと以前に翻訳されている。マーシャル・マクルーハン・井坂学訳『機械の花嫁・産業社会のフォークロア』, 新装版, 1991, 竹内書店新社。
- 16) Mortimer Adler は、1940年に“*How to read a Book*”, という「本」の読み方を教える本を出した。リチャーズの影響を受けていると称しながら、全く似て非なるものであった。リチャーズは余程気に入らなかつたのか、“*How to read a Page*”を書いた。サブタイトルは、“*A course in Efficient Reading, with an Introduction to One Hundred Great Words*”になっていた。なんの皮肉かは言わなくても明らかである。マクルーハンも先生を応援して“*How to read a poem*”と題するラジオの放送講演を行なう。マクルーハンはこれを元に『詩をどう読むか』という本をつくる予定だったが、勿論完成しない。
- 17) (eds). Eric McLuhan, Frank Zingrone; *Essential McLuhan*, p. 267, 1996, Basic Books.
- 18) (eds). David Morley, Kuan-Hsing Chen; *Stuart Hall: Critical Dialogues in Cultural Studies*, p. 132, 1996, Routledge.
- 19) 井坂学訳, pp. 236-237.
- 20) Harold Adams Innis; *The Fur Trade in Canada*, 1930. 1984年にトロント大学から新版が出る。
The Cod Fisheries; The History of International Economy, 1940. 1978年にトロント大学で再版。
Political Economy in the Modern States, 1946, Ryerson Press.
- 21) H. A Innis; *Empire and Communication*, 1950. トロント大学から1972年に再刊。ほか1986年にDavid Godfreyの編集で新版が (Press Porcépic) 出ている。邦訳は『メディアの文明史——コミュニケーションの傾向性とその循環』として、1987年, 新曜社, がある。
The Bias of Communication, 1951. これも、1964年, トロント大学から再版されている。中継ぎになる重要な仕事として,
The Press: A Neglected Factor in the Economic History of Twenties Century, 1949, Oxford University Press.
- 22) *Harold Adams Innis: Portrait of a Scholar*, 1957, University of Toronto Press.

Karl Deutsch, "Review of Harold Innis, *Empire and Communication and the Bias of Communication*, *Journal of Economics and Political Science*, 1952, No. 17.

いまでも、すぐれた論文後藤和彦「コミュニケーション史の研究史——コミュニケーション史論への一つのアプローチ——」, 講座・コミュニケーション2『コミュニケーション史』, 1973, 研究社。

最近イニスに触れた文献としては、有山輝雄「メディア史を学ぶということ」, 有山輝雄・竹山昭子編『メディア史を学ぶ人のために』, 2004, 世界思想社。

- 23) Pitrim Sorokin, Robert. K Merton, "Social Time: A Methodological and Functional Analysis", *American Journal of Sociology*, 1937, vol. 42, No. 5.

- 24) M. McLuhan, "The Later Innis", *Queen's Quarterly*, 1953, vol. 60, No. 3.

「かれ（イニス）の後期の散文において、パラグラフの直線的発展、パースペクティヴはほとんど全く捨てられ、単一ショットの素速いモンタージュがとって代っている。かれは一つの濃縮した観察を別な観察と対置させ、一つの洞察やイメージに別のイメージを次つぎと積み重ね、多様な関係がある、という感覚を創造しようとしている……」。

つまり、マクルーハン、自分のモンタージュ手法に近づいている、と言うのである。そうとばかりは必ずしも言えないが、イニスの文体が変わって来ているのは事実であり、かれが従来の論文の「書き方」を変えようと試行していたことは、たしかである。イニスが三通りの「脚注」をつけていることなどに、もっと注目すべきであろう。

- 25) H. A. Innis; *Changing Concepts of Time*, 1952, University of Toronto Press.

- 26) Richard Cavell; *McLuhan In Space: A Cultural Geography*, 2002, University of Toronto Press.

以下の本には、マクルーハンを広いヨーロッパ的世界のなかに置いて見る点で、多くのことを学ばして貰った。が、ベンヤミンも含めたフランクフルト学派と平行・対置して見て行こうとする著者の基本骨格には、どうみても無理があるように思う。大きく重なる部分はあるが、マクルーハンの「産業社会」という概念は「資本主義」（あるいは高度資本主義）という概念と違うし、悪いという意味では毛頭ないが、マクルーハンにはマルクス主義の素養がまるでないからである。たしかに、「弁証法」の類同物とみられるような論理運びは、時おりみられないことはないが、全く系統が違っている。

Judith Stamps; *Unthinking Modernity: Innis, McLuhan, and the Frankfurt School*: 1995, McGill-Queen's University Press.

またこの関連では、M. マクルーハン、E. カーペンター、大前正臣・後藤和彦訳『マクルーハン理論—電子メディアの可能性』, 2003年, 平凡社ライブラリー。

- 27) これの発想源は、エリオットではないのかも知れない。そうでないとすればトマス「天使論」("Angelology")ではないか。天使は推理しないで、即座に直覚する。マクルーハンは、エレクトロニック・メディアによる瞬間的伝達を、「われわれ」を「天使」に近づけるものと考えていたらしい。勿論、メタファーとしてであるが、「超人」であれ「天使」であれ、人間が人間の存在を超えたものになるというのは、私などには単なる妄想としか思えないが、ある種の宗教的意識にとっては、なじみやすいコースなのかも知れない。

Tom Dilworth, "McLuhan as Medium", in (eds). J. Moss, L. M. Morra; *At the Speed of Light There is Only illumination: A Reappraisal of Marshall McLuhan*, 2004.

- 28) 中村雄二郎『共通感覚論』, 2000, 岩波現代文庫。

29) 訳本をあげておく。

森常治訳『ゲーテンベルクの銀河系：活字人間の形成』, 1986年, みすず書房。

後藤和彦・高儀進訳『人間拡張の原理：メディアの理解』, 1967, 竹内書店新社。

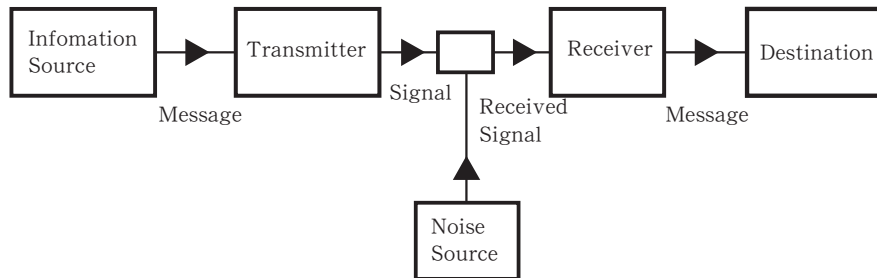
栗原裕・川本伸聖訳『メディア論：人間の延長の諸相』, 1987年, みすず書房。

後者をここでは『メディアを理解する』として、使っている。

30) ある研究者は、マクラーハンのすべてのメディアは「経験を新しい形に翻訳する」をひいて、マクラーハンのはワルター・ベンヤミンによく似た、一種の「翻訳」(“translation”)理論だとみている。

Janine Marchessault; *Marshall McLuhan: Cosmic Media*, p. 81, 2005, Sage Publications.

31) シヤノン・ウィーバー・モデル。



マクラーハンは同じような発言をなん度かしている。Graeme Patterson; *History and Communications: Harold Innis, Marshall McLuhan, the Interpretation of History*, 1990, Toronto University Press.

この点は重要な問題を含んでいるが、ここでは立ち入らない。たとえば、ハーバマスは「……『ドイツ・イデオロギー』の第一章を正確に分析してみると、マルクスは相互行為と労働の連関を本格的に説明せず、社会的実践というあいまいな名称のもとに、一方を他方に、つまりコミュニケーション行為を道具を用いた行為に還元している。……この道具を用いた行為がすべてのカテゴリーをうみだす模範となり、一切は生産の自己運動に解消されるのだ。」と批判していることの逆の問題といえよいか。

ユルゲン・ハーバマス・長谷川宏訳『イデオロギーとしての技術と科学』, 49頁, 2000年, 平凡社ライブラリー。

32) この批判が重要なことは、飯塚浩一が指摘している。

飯塚浩一「マクラーハン理論再考——メディアの総合的理解に向けて——」, 『東海大学紀要文学部』, 第61輯, 1994年。

Umberto Eco; *Travels in Hyperreality*, 1986, Harcourt Brace Jovanovich.

33) Raymond Williams; *Television: Technology and Cultural Form*, 1974, Schocken Books.

34) 佐々木亘『トマス・アクイナスの人間論：個としての人間の超越性』, 2005年, 知泉書館。

Stephen P. Menn, “Metaphysics: God and being (Univocity, Equivocity, Analogy)”, in (ed) A. S. McGrade; *Medieval Philosophy*, 2003, Cambridge University Press.